集刊東洋学 第一一七号 平成二十九年六月 四四－六三頁

「乱流趨正絶」と「乱流趨孤嶼」

――謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の読み――

佐竹保子

一　はじめに――問題の所在

李善（七世紀）注『文選』巻二十六所収の謝霊運（三八五～四三三）「江中の孤嶼に登る」詩は、李善注『文選』系諸本と五臣注『文選』（八世紀初に上進）系諸本とで、五句目が異なっている。以下に、五句目を両様に示して詩篇を引用する。訳は、拙稿の検討対象となる五句目のみ省く。以後も、その解釈が検討対象となる原文については訳を省いており、どうぞ御了承願いたい。

江南倦歴覽、　川の南はうんざりするほど巡り見た
江北曠周旋。　川の北ははるかにめぐり行く
懷新道轉迥、　目新しさを慕えば道はますます続き
尋異景不延。　珍しさを尋ねれば日脚は伸びない
亂流趨正絶（李善注系諸本）／亂流趨孤嶼（五臣注系諸本）、
孤嶼媚中川。　孤島が川の半ばにうるわしい
雲日相輝映、　雲と太陽が輝いて映じあい
空水共澄鮮。　空と水がともに澄んであざやかだ
表靈物莫賞、　霊妙さを表しても賞するものも無く
蘊真誰爲傳。　真実を包みもっても誰が伝えよう
想像崑山姿、　想像するのは崑崙山のすがた
緬邈區中緣。　遠ざかりゆくこの世のえにし
始信安期術、　始めて信じた　仙人安期生の術が
得盡養生年。　命を養う日々を全うさせることを

李善注『文選』は、顯慶三年（六五八）に上進されている。李善注を収める『文選』諸本の巻頭に「李善上文選注表」が付され、その末尾に「顯慶三年九月十七日文林郎守太子右内率府録事參軍崇賢館直學士臣李善上表」とある。[1]

他方、五臣注を収める『文選』には、開元六年（七一八）付けの上表文「進集注文選表」が付される。その末尾に「開

元六年九月十日工部侍郎臣呂延祚上表」とある。[2]

世に出たのは、上掲詩の五句目を「亂流趨正絶」に作る李善注本の方が、「亂流趨孤嶼」に作る五臣注本よりも、半世紀以上早い。ところが、その李善注本『文選』よりさらに三十数年早く上奏されている『藝文類聚』[3]にも、該詩は収められている。『藝文類聚』は、王溥（十世紀）の編纂した『唐會要』に、武徳七年（六二四）の上進と記される。[4]『藝文類聚』巻二十八「遊覧」は、該詩の五句目を、五臣注系『文選』諸本と同じ「亂流趨孤嶼」に作る。

『藝文類聚』と五臣注『文選』が同じ「亂流趨孤嶼」に作る以上、七世紀以前の諸写本において、該詩五句目を「亂流趨孤嶼」とするテキストが存在したことは確実であろう。宋代に版本となる時に、『藝文類聚』と五臣注『文選』が、該句をともに「趨正絶」から「趨孤嶼」に改めたとは考えがたいからである。

それでは同じ頃の写本に、「趨正絶」に作るテキストは、存在しなかったのか。「存在しなかった」と考えるのが、梁章鉅（一七七五～一八四九）の『文選旁證』である。[5]その巻二十三にいう。

尋義、作趨孤嶼爲長。下句重上字、古詩常有。疑注引爾雅、但釋詩亂字、而後人沿注、故改重文耳。（意味を考えれば、「趨孤嶼」に作るのがよい。下句が上の字を重ねるのは、古詩によくある。おそらく注に引く『爾雅』が、詩の「乱」字を解釈しているだけなのに、後人がその注によって、重なる字を改めたのだ）

「下句重上字」とは、「亂流趨孤嶼」に作る場合、「下句」が「孤嶼媚中川」であるから、「上字」の「孤嶼」が「下句」に「重」なることをいう。「注引爾雅」とは、李善が該句に、次のように付注していることを指す。

爾雅曰、水正絶流曰亂。[6]（『爾雅』にいう。水の「正絶流」は「乱」というと）

『文選旁證』は、「下句」が「上字」を重ねる「重文」は「古詩」に「常有」の技法であるのに、「後人」が「重文」を避けようと「注」に引く『爾雅』の「文」に「沿」って「孤嶼」を「正絶」に「改」めた、とする。李善以前に『爾雅』が付注されていたのか、付注されていたとすればそれがいつ頃まで遡るかは、もとより不明である。だがとにかく『爾雅』付注以前は「亂流趨孤嶼」であったはずだと、『文選旁證』はいう。以後、胡紹煐（一七九二～一八六〇）『文選箋證』[7]や、現代の研究者も、この説を引用する。

とはいえ『文選旁證』に「疑うらくは」とある通り、この説は書き手の推測にすぎない。写本の時代のテキストであるから、版本時代よりもはるかに多くの異文が発生しえた。「亂流趨正絶」が『爾雅』付注以前からあった異文の

一つなのか、それとも『文選旁證』説のとおりに、付注された『爾雅』に「沿」って後人が「改」めたものなのか、今となっては判定しようがない。

よってここでは、「亂流趨孤嶼」であれば「江中の孤嶼に登る」詩全体がいかに読み解かれるのか、「亂流趨正絶」ならいかなる差違が生じ、いかなる効果がもたらされ、あるいは消滅することになるのか、を考察する。そうすれば「趨孤嶼」と「趨正絶」のそれぞれを伝えてきた人々が、該詩をいかに読もうとしたのか、彼らの読みの姿勢をもうかがうことができると考えられるからである。

二 「重文」

「亂流趨孤嶼」と「亂流趨正絶」との大きな違いは、次句との関わりにある。『文選旁證』の指摘するとおり、「亂流趨孤嶼」は、その下句「孤嶼媚中川」に、上字の「孤嶼」を重ねる形となる。現代の修辞学で「頂真格」と称される技法である。「頂真格」それ自体はたしかに、『文選旁證』の説くように「古詩に常有」である。現存する謝霊運詩にも、管見の限り二十数例が見出される。

だが、下句に上字を重ねる技法は、決して一様ではない。詳細はかつて拙稿に述べたので、[8] ここにあらましを略述することをお許し願いたい。

上下両句に同語をくり返すと、両句間に強い連続性が生じる。それゆえこの技法は、両句間に断絶性がある時に多く用いられる。連続性と断絶性との、絶妙なバランスが醸しだされるからである。

両句間の断絶は、たとえば両句が、換韻する別々の聯に属する場合に生じる。曹植（一九二～二三二）「白馬王彪に贈る」の「欲還絶無蹊、攬轡止踟躕。踟躕亦何留、相思無終極（戻ろうとしても細道も無く、たづなを執ったままで行きなやむ。行きなやんでもどこに留まるのか、君への思いは果てしない）」（『文選』巻二十四）等である。右の詩では、重なる語が前聯の下句と後聯の上句に現れる。前聯の押韻字は「躕」、後聯のそれが「極」で、後聯以後は換韻している。この型は『詩経』以来多用されており、謝詩にも九例ほど見いだされる。[9]

また、同様だが換韻しない型もあり、換韻する場合より、断絶性がやや弱まる。この型は『詩経』には二例と少ないが、以後は多用され、謝詩には九例見いだされる。[10]

以上二つの型が、異なる聯で語を重ねるのに対し、「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」は、同じ聯で語を重ねている。すでに一聯としてひとまとまりをなす中に、さらに同じ語を重ねるので、断絶性が後退して連続性が前面に出る。この

型は、謝詩にほかに六例あるが、そのほとんどが詩篇の初聯に配される。詩篇半ばで二字の同語を重ねるのは、五臣注本系『文選』所収の「江中の孤嶼に登る」詩一例にとどまる。『詩経』においても、何種類かの重文を複数聯に配してことさらに連続性を強調するものでない限り、一聯内に二字の語をくり返す重文は、その詩篇の初聯か換韻直後の初聯に現れる。『詩経』以後謝詩までの詩篇でも同様である。詩篇半ばで二字の語を重ねるのは、管見の限り、「古詩　焦仲卿の妻の為めに作る」（『玉臺新詠』巻一。以下「古詩焦仲卿」と略称する）、曹植「徐幹に贈る」（『文選』巻二十四）、郭遐周「嵇康に贈る」三首の一（『嵇中散集』巻一）の三篇にとどまる。「古詩焦仲卿」では一七〇聯を越す長篇の二十二聯目に、「徐幹に贈る」は全一四聯の一一聯目に、「嵇康に贈る」は全一一聯の八聯目に、それぞれ重文が配されている。

右の三篇には共通点がある。重文までの聯と重文直後の聯の間に、場面転換が起こっていることである。たとえば「古詩焦仲卿」に「便可速遣之、遣之慎莫留。府吏長跪告、伏惟啓阿母（だからさっさと追いだすがよい、追いだしてくれぐれも引き留めてはならぬ。府吏（焦仲卿）はひざまずいたまま言った。恐れながら母さまに申しあげます）」とある。前聯の押韻字は「留」、後聯の押韻字は「母」で、後聯は換韻する。まず換韻という形で、前聯と後聯が分段される。内容も、前聯までは「阿母」の語りであり、後聯以後は、息子である「府吏」の抗弁である。

曹植「徐幹に贈る」と郭遐周「嵇康に贈る」は一韻到底だが、同様に、重文直後に場面が転換する。

先述したように、異聯間の重文が断絶性と連続性の両面を持つのにくらべ、同聯内の重文では、連続性のみが際だつ。上句と下句で同じ語を重ねることで、上下句間の紐帯が強まり、一聯内が緊密化する。その緊密化が相対的に、該聯と他聯との隔たりを印象づける。同聯内の緊密化が、異聯間の隔たりを惹起する。その相対的な隔たりを、右の三篇は、詩中の場面転換に活用しているようにみえる。[11]

以上、『文選旁證』の所謂る「下句に上字を重ねる」技法について、前稿の検討結果を略述した。『文選旁證』はこの技法を「古詩に常有」とするが、それは、異聯間で、前聯下句の語を後聯上句に重ねる場合のことである。この型なら謝詩に二〇例近く、『詩経』から謝詩までの用例も多い。ところが「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」のように、詩篇半ばの一聯内で二字の語を重ねる例は、謝詩には右の一例にとどまる。謝詩に至るまでも、管見の限り三例ほどで、決して「古詩に常有」ではない。そしてその三例では、重文が、詩篇に場面転換の起こる直前に配されている。

三　対と非対

では「江中の孤嶼に登る」詩において、全篇の脈絡はどのようであるのか。該詩の原文のみを再掲する。

江南倦歴覧、江北曠周旋。懐新道轉迥、尋異景不延。
亂流趨孤嶼（正絶）、孤嶼媚中川。
雲日相輝映、空水共澄鮮。表靈物莫賞、蘊真誰爲傳。
想像崑山姿、緬邈區中緣。始信安期術、得盡養生年。

全七聯中三聯目が、現存する『藝文類聚』や五臣注本系『文選』で、「孤嶼」の語を重ねている。詩の主人公は、「江南」と「江北」を「歴（へ）」「旋（めぐ）」り、「新」「異」を求めて、空間（「道」）を踏破し、時間（「景」）を蕩尽してきた。「孤嶼」は、彼が行き着いた最終地点である。四聯目がその「孤嶼」の景観であり、それゆえ三聯目から連続しているように見える。しかしその眺めは、主人公が一度も目にしたことのないものであった。

「雲」と「日」が「輝」き「映」じ、「空」と「水」が「澄」みわたる。彼の求める「新」「異」をはるか超えた次元に、それは属している。だから最終聯で彼は、「安期」生の「術」を「始」めて「信」じることができたのである。

四聯目以降は、三聯目までの、しゃにむに動く彼とは別次元にある。ここに「下句に上字を重ねる」聯を境とした、場面転換の断絶を見いだしうるかもしれない。前章に挙げた「古詩焦仲卿」「徐幹に贈る」「嵇康に贈る」のように。

だが、腑に落ちない点が残る。第一に、前章に挙げた三篇は、それぞれ一七〇聯以上、一四聯、一一聯という、長篇か中篇であった。「江中の孤嶼に登る」詩は全七聯で、謝霊運詩としても短篇に入る。[12] しかも謝霊運の他の山水詩同様、詩語は精練され凝縮されている。その精練と凝縮の短篇に、「孤嶼」の語が、題名も含めて三度登場する。「孤嶼」が重なりすぎていないか。

第二に、三聯目が重文であれば、前章に記したとおり、その上句と下句、すなわち「亂流」句と「孤嶼」句の連続化・緊密化が促される。しかし「亂流」句と「孤嶼」句は緊密に連なる句なのか。むしろ両句の間には、断絶が見えるのではないか。

上掲の「江中の孤嶼に登る」詩を一見して明らかなのは、全七聯のほとんどが対偶をなすことだ。一聯目と二聯目、および四聯目から六聯目に至るまで、聯内の上下句の構造が同様である。最終聯「始信安期術、得盡養生年」は、上句二字目「信」の目的語が、「安期術、得盡養生年」であるが、上下句の構造は一致している。上句の「始」と下句の「得」は、主要な述語である上句「信」と下句「尽」を補助する助字と考えられる。[13] 最終聯は、後世に言う流水対

とみなせる。

全七聯中六聯が対偶なので、残る「亂流」聯も対偶をなせば、該詩は全対となる。げんにそう考える研究者もいる。彼らは「亂流」句を「孤嶼」句の構造に合わせて、「乱」が「流」を形容する連体修飾語であり、「亂流」が「趨」の主語だと読む。[14]「乱るる流れは孤嶼に趨き、孤つなる嶼は中川に媚し」である。

しかし「亂」字が「流」を形容する修飾語でないことは、現存文献で最古の読解者たる李善が、その注によって示している。再度、注の原文のみを記す。「爾雅曰、水正絶流曰亂」。出典の『爾雅』釈水は次のようである。

逆流而上曰泝洄。順流而下曰泝游。正絶流曰亂。（流れに逆らって上るのは「泝洄」という。流れに順って下るのは「泝游」という。「正絶流」は「乱」という）

『爾雅』の「逆流」は「逆渡」のこと、「順流」は「順渡」のこと、と邢昺（九三二～一〇一〇頃）の疏の引く孫炎（三世紀）の説にいう。[15] つまり「逆流」「順流」は水流の状態ではなく、人間が水流をいかに「渡」るかをいう、と。さらに郭璞（二七六～三二四）も、「泝洄」「泝游」について、「皆な詩に見ゆ」と付注する。「詩」とは、邢昺の疏にいうとおり、『詩経』秦風「蒹葭」の次のくだりを指す。訳文は目加田誠氏に拠る。[16]

所謂伊人、　あわれわが思える人は
在水一方。　大川の水の彼方に
遡洄從之、　川のぼりゆかむとすれば
道阻且長。　道とおみ至りもやらず
遡游從之、　川くだりゆかむとすれば
宛在水中央。　おもかげは水のさ中に

「所謂る伊の人」に、「遡洄」すれば至り難く、「遡游」すれば「水の中央」に「在」るとうたう。よって「遡洄」「遡游」はともに、詩の語り手すなわち人間が、水を渡ることである。『爾雅』の「泝洄」「泝游」について、孫炎の説く所と一致する。

そうとすれば『爾雅』の三句目「正絶流曰亂」も、人の水渡りを指すものであり、それも「泝洄」「泝游」とは異なる三種目の渡り方を意味することになろう。「泝洄」「泝游」は水流に平行に、上るか下るかする渡り方であった。それらと異なる三種目とは、水流に対して垂直に、流れを横切る渡り方以外ありえない。郭璞が「直横渡也」と付注するとおりである。郭璞はさらに「書曰、亂于河」と、『尚書』に右の意の「亂」字があるという。『尚書』「禹貢」の、「梁州」についての一節である。

西傾因桓是來。浮于潛、逾于沔、入于渭、亂于河。

偽孔伝に拠れば、「西傾」は山名、「桓」は西傾山から流

れる川である。[17] 吉川幸次郎氏が「西傾山より桓水にそいつつ来れば、潜水に浮かび、沔水をこえ」「渭水に入り、黄河をつっきった。[18]」と訳すとおり、「來」「浮」「逾」「入」とともに、「亂」も、人間の行為を指すことは疑いない。偽孔伝はここに、『爾雅』の「正絶流曰亂」を引く。

「亂」は、『詩経』大雅「公劉」にも次のようにある。

篤公劉、　　心の篤い公劉は[19]
于豳斯館。　豳の地に館を設けた
涉渭爲亂。　渭水の流れを横切って

紀元前の毛伝は「正絶流曰亂」と記し、鄭玄（一二七～二〇〇）は「乃使人渡渭水、爲舟絶流（そこで人を使わし渭水を渡らせ、舟で流れを横切らせた）」と説明する。詩の「爲亂」を「爲舟絶流」と敷衍している。その主体は「人」である。「亂」は、「人」の行為と解されている。

「江中の孤嶼に登る」詩に戻れば、李善はおそらく、詩中の「亂」が『尚書』や『詩経』にある由緒正しい語であることを示そうとして、『爾雅』を引用している。その『爾雅』や『尚書』『詩経』に基づく限り、「亂」は、人が水流を渡る行為を意味する。よって「亂流」に続く「趨」の主体も、「亂」の主語と同一人物である。「亂流趨」とは、明示されていない主語である語り手が、「流れを乱りて趨く」のである。したがって同聯下句の「孤嶼は媚し」とは、句の構造を異にする。

「孤嶼」句は、「亂流」句の対句ではない。「江中の孤嶼に登る」詩は、全七聯中「亂流」聯のみが、非対の聯なのである。

四　「亂流」句と「孤嶼」句の断絶

全篇中唯一の非対である「亂流」聯の上句は、これに先立つ第一・二聯とまとまりをなす。「江中の孤嶼に登る」を、再度原文のみ掲げる。「江南倦歴覧、江北曠周旋。懐新道轉迴、尋異景不延。亂流趨孤嶼（正絶）、孤嶼媚中川。雲日相輝映、空水共澄鮮。表靈物莫賞、蘊真誰爲傳。想像崑山姿、緬邈區中緣。始信安期術、得盡養生年」。

第一聯上句「江南倦歴覧」で、「倦」「歴覧」の主体が、語り手であることは間違いない。下句「江北曠周旋」でも、「曠」「周旋」の主体は、句中に明記のない語り手である。

第二聯「懐新道轉迴、尋異景不延」はどうか。各句後三字で、主語はそれぞれ「道」「景」であるが、初字「懐」「尋」の主体は、やはり語り手である。第五句の「亂」「趨」の主体が語り手であることは、前章に確認した。

以上のように、「江南」聯から「懐新」聯を経て「亂流」句に至るまで、主要な述語は主語が明記されない形で綴ら

れ、その主語は一貫して語り手である。ここまでは、語り手が主体となり、彼の「江南」と「江北」の空間（「道」）踏破と時間（「景」）の蕩尽が詠じられる。

では、「亂流」聯下句の「孤嶼」句はどうか。「孤嶼」句の述語「媚」の主語は「孤嶼」で、句中に明記される。第四聯「雲日相輝映、空水共澄鮮」の「輝映」と「澄鮮」の主語は、それぞれ「雲日」と「空水」で、これも句中にある。第五聯「表靈物莫賞、蘊真誰爲傳」は、前掲した第二聯の構造に似る。各句後三字の主述文を導きだす初二字に、主語の明記がない。しかし「表靈」「蘊真」の主体が、「雲日」「空水」を包含する「孤嶼」であることは、「孤嶼」句からの文脈で判断できる。

前半の「亂流」句までとは対蹠的に、「孤嶼」句から「表靈」聯までは、「孤嶼」が中心となる。焦点は「孤嶼」にある。「亂流」句までは語り手の動きを詠じていたが、「孤嶼」句以後は、語り手が姿を消す。蕩尽されていた時間は停止し、踏破されていた空間も静止する。時がとまる静謐の中に、「孤嶼」のみが浮かび上がる。

語り手から「孤嶼」へ、動きから静止へ、幅のある時間帯から光に満ちた一瞬へ。その切りかわりが、「亂流」聯の、まさに只中で起こっている。聯と聯の間ではなく、「亂流」聯の、上句と下句の間で、なされている[20]のである。

五　「趨正絶」

清代の何焯（一六六一～一七二二）は「亂流」聯を次のように評す[21]。

妙在上句一頓。（すばらしさは上句の「一頓」にある）

上句のあとに停頓があり、それが素晴らしいという。「上句の一頓」は、上下句間の非連続性、断絶性を指そう。前章に見たような、上下句間に存する焦点の切りかわりに、何焯は気付いていたと考えられる。

ただ何焯は該詩を、「亂流趨正絶、孤嶼媚中川」のテキストで読んでいる。小論第二章に記したように「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」では、上下句間に、「孤嶼」を紐帯として強い連続性が生ずる。そのため「上句」に「一頓」があるとは感じ得ない。焦点の切りかわりによる「上句の一頓」、すなわち上下句間の断絶を、何焯のように感得するには、「趨孤嶼」ではなく「趨正絶」でなければならない。

しかし何焯のように「亂流趨正絶」で読むなら、「趨正絶」とはどういうことか。小論第三章に挙げた『爾雅』を見れば、「正絶」とは「亂」にほかならず、それは人が水流を渡る行為であった。その「亂」に「趨」くとは、ほとんど意味をなさない文に見える。前掲の『文選旁證』が「義を尋ぬれば、『趨孤嶼』に作るが長為り」と評するゆえんで

ある。よって、ここで改めて、「正絶」の「義を尋」ねる必要がある。その前提としてまず「亂」を検討する。

『爾雅』の「流れに逆いて上るは『泝洄』と曰う。流れに順いて下るは『泝游』と曰う。『正絶流』は『乱』と曰う」は、水渡りの三類を記していた。前二類は川筋に平行に、上るか下るかであり、後一類は、川筋に垂直に、それを横切る渡り方であった。とすれば水を攪乱する範囲は、川幅分を渡る後一類が、圧倒的に大きい。ならば後一類を「亂」と称するのは、その渡りが、水流を大きく攪乱するものであることをも含意していないか。「泝洄」でも「泝游」でも「渡」でもなく、敢えて「亂」と名付けられたゆえんは、「亂」字に含まれるミダス・ミダレル意が、多層的に重ねられている可能性がある。

同じことが、「亂」を解説する「正絶流」にも言える。川筋に垂直に渡れば、川幅分の水流が次々に断ち切られる。かく水流を次々に断ち切る渡り方ゆえに、それを「絶」と称した可能性はないか。

「絶流」と似た語で、謝霊運が用いた有名なことばに「截流」がある。彼は涅槃経の改訳で、旧来の「手把脚踏、得到彼岸」を「運手動足、截流而度」と改めたとされる。僧肇（四世紀後半～四一四）の「肇論」に付された慧達（六世紀）「序」に対する、元康（七世紀後半～八世紀初）「疏」に、それが記される。[22] 慧達の「序」は、道安（四世紀）鳩摩羅什（四世紀後半～五世紀初）以来の名僧「三千余僧」・名士「八百許人」の中で、僧肇だけが、「語」「黙」双方に卓越した「有美」の人だと讃えている。[23] 元康の「疏」は、慧達の「語」を「文」、「黙」を「理」ととらえ、道安や羅什は「唯だ理を得るのみにして文に闕くる所有り」、僧叡や謝霊運は「唯だ文を得るのみにして理に闕くる所有り」と記す。その上で、謝霊運の「文章秀発」の例として、涅槃経の改訳を挙げる。「如（たと）えば涅槃（ねはんぎょう）は元来質朴なり。本と言う『手は把（と）り脚は踏み、彼岸に到るを得』と。謝公改めて云う『手を運び足を動かし、流れを截（た）ちて度（わた）る』と」。

謝霊運訳の「截流而度」の「截」は、「絶」と同じく「断つ」意味を含む。音も「絶」にきわめて近い。[24] 一方の岸から他方の岸への水渡りを、謝霊運が、水流を断つ像でとらえていたことをうかがわせる。

そして「江中の孤嶼に登る」詩にもどれば、水流を「絶」つものは、川を渡る者だけではない。「江中」に存する「孤嶼」もまた、水流をさまたげ途絶させている。ならば「趨正絶」の「正絶」とは、「孤嶼」がさまたげて途絶させている水流を指してはいないか。水流が「正絶」する背後に、川を渡る者と、川中に聳える「孤嶼」が、ある。

とはいえここで重要なのは、「亂流」聯上句の「亂流趨

正絶」に、いまだ「孤嶼」が登場していないことである。「亂流趨正絶」で、語り手の目線は、川面の水流にある。そこから視線をやや上方に伸ばしたとき、はじめて「孤嶼」が目に入る。下句の「孤嶼媚中川」である。ここで焦点が、語り手から「孤嶼」に切りかわる。上句で「正絶」の背後に隠れていた「孤嶼」が、意外性を伴いつつ、語り手にかわって主語の位置に立つのである。

この意外性に、「正絶」のテキストで読む何焯や沈徳潛（一六三七～一七六九）は気づいていた。彼らはそれを「忽」の語で表す[25]。何焯はいう。

亂流趨正絶二句　妙在上句一頓。舟行兀兀、忽推蓬遠眺、心目俱曠。（（後三句の訳）舟はゆらゆら行き、ふと苫を推しやり遠くを眺めると、心も目もはるかにひろがる）

沈徳潛はいう。

亂流二句、謂截流而渡、忽得孤嶼。余嘗遊金焦、誦此二句、愈覚其妙。（「乱流」二句は、流れを截って渡ると、ふいに孤嶼が見えたことをいう。むかし金山や焦山（ともに江蘇省鎮江市）に遊んだとき、この二句を唱えて、そのすばらしさをいっそう実感した）

上句「亂流趨正絶」で、語り手は水渡りに没頭している。そのさなかに「孤嶼」が、彼の意識の外から、思いがけなくも姿をあらわす。

こうした意外性を帯びる「孤嶼」は、「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」という文字の並びからは感得しがたい。上句に「孤嶼」が示され、語り手がすでに「孤嶼」を知っているからである。彼は、自分が流れを乱るのは「孤嶼」に趨くためだと知っている。それゆえ、その「孤嶼」が中川に媚しいという下句に、未知の対象を発見した驚きは含まれない。既知の対象の描出となる。

六　謝詩の語構成の破格

じつは「亂流」句については、斯波六郎氏がつとに「いま、江水を渡り、流れの断ち切れるところに行くと」と訳し、「正絶は、水の流れをたち切っているところ、すなわち島」と解説している[26]。小稿前章の解釈と同様である。だが氏は同時に、「ただし、文選の一本では、正絶を孤嶼に作る。この方がすなおである」と付言する。

たしかに『爾雅』が「正に絶る」意とする「正絶」を、「趨」く先として解釈するのは無理があり、「すなお」でない。小論注2所掲の『景印宋本五臣集注文選』（いわゆる陳八郎本）に付された一九八一年の鄭騫「跋」も、五臣注本の正文が李善注本より「文義」に「勝」る例として、「江中

の孤嶼に登る」詩の三聯目を挙げる。「李善注本は、文義がつかえて通じがたい（善注本文義杆格難通）」が、五臣注本の正文は「字句が滑らかですなおなので（李善注本で通じがたい所が）さらりと氷解する（文從字順、渙然冰釋矣）」という。

しかし謝詩はそもそも、「すなお」で「文從字順」だったか。

吳冠文・陈文彬『庙堂与山林之间：谢灵运的心路历程与诗歌创作』は、謝霊運の詩語の新奇な用例（「新颖用法」）として、名詞を動詞化・形容詞化した例、動詞を名詞化した例、形容詞を動詞化した例、形容詞を名詞化した例、多くの情報を詰めた圧縮語や省略語の例を挙げている。[27] その中の動詞を名詞化した二例は、「晨に策きて絶壁を尋ね、夕べに息いて山棲に在り（晨策尋絶壁、夕息在山棲）」（「登石門最高頂」『文選』巻二十二）の「棲」字、及び「羈の心は秋晨に積み、晨に積むは游眺を展ばす（羈心積秋晨、晨積展游眺）」（「七里瀬」同巻二十六）の二句目の「積」字であるという。形容詞を名詞化した七例は、「清きを渉りて漪漣を弄ぶ（涉清弄漪漣）」（「發歸瀬三瀑布望兩溪」『古詩紀』巻四十八）の「清」、「澗を過ぎて既に急なるを厲り、棧に登りて亦た緬かなるを凌ぐ（過澗既厲急、登棧亦凌緬）」（「從斤竹澗越嶺溪行」『文選』巻二十二）の「急」と「緬」、「流れを遡りて驚急に触れ（遡流觸驚急）」（「富春渚」同巻二十六）の「驚」と「急」、さらに「目を極めて左の闊きを睞、廻顧して右の狭きを眺む（極目睞左闊、廻顧眺右狹）」（「登上戍石鼓山」『古詩紀』巻四十七）の「闊」と「狹」であるという。

これに拠れば、「江中の孤嶼に登る」詩の「流れを乱りて正絶に趨く」も、『爾雅』では動詞に用いられている「正絶」が、名詞化された例と考えうる。とはいえ、難点が一つある。吳・陈両氏は、所掲の語に対する李善注や五臣注、さらに謝詩を始めとする他作品の用例を提示し、考証を重ねた上で各語の品詞を定めているのだが、品詞概念の無かった当時の語に、品詞を当てはめることには、やや躊躇を覚える。それよりも、一文の構造上その語が他の語といかなる関係を結んでいるか、すなわち、語のレベルではなく、文のレベルで考えたほうが、たとえ結果は同じでも、当時の実情により即すことになるのではあるまいか。

当時の実情とは、後漢以来対偶化が進み、陸機（二六一～三〇三）において魏晋期の頂点をむかえ、謝霊運がそれをさらに凌駕したという趨勢である。[28] 当時はもとより、主語、述語、客語、連体修飾語、連用修飾語という術語は存在しなかったが、しかし、文中の各語が相互にいかなる関係を取り結び、いかなる機能を果たしているかという認識

がなければ、ある句と次の句、ある聯と次の聯を対偶に整えることは、原理的に不可能であろう。

一文の構造という面から見れば、謝詩には、李善の示す出典で述語として機能している語が、客語に変えられている例が少なくない。その語に傍線を付して以下に示す。構造を見易くするため、現代語訳ではなく訓読を付す。

1. 秦趙欣來蘇、燕魏遅文軌。秦・趙は来蘇を欣び、燕・魏は文・軌のおなじきを遅つ。（「述祖德」二首其二『文選』巻十九）

李善は「尚書」の「予が后を俟つ。后の来らば其れ蘇らん」を引く。『尚書』「仲虺之誥」に、湯王の遠征を慶ぶ民の言葉として登場する。出典の『尚書』では「来」も「蘇」も述語だが、謝詩では「来蘇を欣ぶ」と「欣」の客語に変えられている。

2. 請附任公言、終然謝夭伐。請うらくは任公の言に附き、終然に夭伐を謝らんことを。（「遊赤石進帆舟」同巻二十二）

李善は「荘子」を引く。「太公任」が孔子に、「直き木は先に伐られ、甘き井は先に竭く」（外篇「山木」）と忠告した故事である。『荘子』で「先伐」は述語に配されるが、謝詩ではその変型である「夭伐」が、「夭伐を謝る」と「謝」の客語になっている。

3. 或可優貪競、豈足稱達生。或いは貪競より優るべきも、豈に達生と称するに足らんや。（「初去郡」同巻二十六）

李善は「楚辭」の「皆な競い進み以て貪婪なり」を引く。「離騒」の句で、王逸（二世紀前半）が「競とは並ぶなり。財を愛するは貪と曰い、食を愛するは婪と曰う」と付注している。「貪」も「競」も、「離騒」では述語だが、謝詩では「優」の客語に配される。

4. 負心二十載、於今廢將迎。心に負くこと二十載、今に将迎を廃す。（同右）

李善は「文子」の「聖人は鏡の如く、将らず迎えず」と、「爾雅」の「将とは送るなり」を引く。「文子」では「將」「迎」が述語であるが、謝詩では「廃」の客語である。

5. 即事怨睽攜、感物方悽戚。事に即きては睽攜を怨み、物に感じては方に悽戚たり。（「南樓中望所遲客」『文選』巻三十）

李善は「易」の「睽とは乖るなり」と、「賈誼国語注」の「携とは離るるなり」を引く。『易』序卦伝が、六十四卦の配列を説いて、「家人」卦のあとに「睽」卦が、そのあとに「蹇」卦が来るゆえんを、次のように記す。「家道の窮まれば必ず乖る。故に之れを受くるに睽を

以てす。睽とは乖るなり。乖れば必ず難有り。故に之れを受くるに蹇を以てす」。賈誼（紀元前二世紀前半）『国語注』は佚したが、韋昭（三世紀）が『国語』に「携とは離るるなり」と付注した七例のうちの一例を見ると、「周語上」の本文に「国の将に亡びんとするや、…其の刑は矯げ誣いられ、百姓は携貳す」、韋昭注に「携とは離るる、貳とは二心なり」とある。『易』の「睽」、『国語』の「攜」ともに述語だが、謝詩では「睽攜」という畳韻語として、双声語の「悽戚」に対しつつ[29]、「怨」の客語に用いられている。

6. 延州協心許、楚老惜蘭芳。延州は心許に協い、楚老は蘭の芳りを惜しむ。（「廬陵王墓下作」同巻二十三）

李善は「新序」の「延陵季子」（「延州」）の故事を引く。晋への使者となった季子が、徐の国に立ち寄り、徐君が季子の宝剣に惹かれていることを察したが、大国を訪うので献上できず、しかし「心に之れを許せり（心許之矣）」。使者の任を果たした帰途、徐君はすでに亡くなっていたが、季子は徐君の墓の樹に、宝剣を帯びさせて去ったという。「新序」で「心許」は季子を主語とする述語だが、謝詩では「協」の客語になっている。

7. 急絃動飛聽、清歌拂梁塵。急なる絃は飛聽を動かし、清き歌は梁の塵を払う。（「擬魏太子鄴中集詩」八首其一　同巻三十）

李善は「抱朴子」の「瓠巴の琴を操れば、翔る禽も之れが為めに下り聴く（瓠巴操琴、翔禽爲之下聽）」を引く。「抱朴子」の「聽」は「翔禽」を主語とする述語だが、謝詩では「動」の客語である。加えて謝詩の「飛」は、「抱朴子」の「翔禽」に当たる。よって「飛聽」は、「聽」が述語なら「飛」はその主語、「聽」が客語となって体言化しているなら「飛」はその連体修飾語となる。「飛聽」は「飛ぶ」モノの「聽く」コトという構造であり、それで対句の「梁の塵」につりあう。詩中の「飛」も、先述した吳・陳両氏のいう「新穎用法」とみなせよう。

以上は、李善所引の典故の述語が、謝詩では客語化している例である。そのほかに、典故を特定できなくとも、述語として機能することの多い語が、謝詩では客語化している例が見いだされる。以下に掲げる。

8. 山行窮登頓、水涉盡洄沿。山行きは登頓を窮め、水涉りは洄沿を尽くす。（「過始寧墅」同巻二十六）

9. 定山緬霧雲、赤亭無淹薄。定山は霧雲緬かに、赤亭に淹薄無し。（「富春渚」同巻二十六）

10. 遡流觸驚急、臨圻阻參錯。流れを遡りて驚急に触れ、

11. 圻に臨みて參錯に阻まる。（同右）
汨汨莫與娛、發春托登躡。汨汨として与に娛しむ莫く、発春に登躡に托す。（「登上戍石鼓山」『古詩紀』巻四十七）

12. 蘋萍泛沈深、菰蒲冒清淺。蘋萍は沈深に泛かび、菰蒲は清浅を冒う。（「從斤竹澗越嶺溪行」『文選』巻二十二）

13. 金膏滅明光、水碧輟流温。金膏は明光を滅し、水碧は流温を輟む。（「入彭蠡湖口作」同巻二十六）

14. 羽人絶髣髴、丹丘徒空筌。羽人は髣髴を絶ち、丹丘は徒だ空筌たるのみ。（「入華子岡是麻源第三谷」同巻二十六）

15. 羈心積秋晨、晨積展游眺。羈の心は秋晨に積み、晨に積むは游眺を展ばす。（「七里瀬」同巻二十六）

16. 薄霄愧雲浮、棲川怍淵沈。空に薄りては雲浮に愧じ、川に棲みては淵沈に怍ず。（「登池上樓」同巻二十二）

17. 伊余秉微尚、拙訥謝浮名。伊れ余は微尚を秉り、拙訥（つたなく訥弁）にして浮名を謝す。（「初去郡」同巻二十六）

最後の二例に注目したい。

16の「雲浮」と「淵沈」は、前掲した7の「飛聴」以上に「新穎用法」と見られる。李善注に拠れば、「雲浮」は「雲」を指さないし、「淵沈」も「淵」を指さない。16の前聯に「潜める虬は幽やかな姿を媚しくし、飛ぶ鴻は遠き音を響かす（潜虬媚幽姿、飛鴻響遠音）」とある。これを承けて、「雲浮」は「飛鴻」を、「淵沈」は「潜虬」を指す。李善注に「今己れは俗網に嬰る、故に虬鴻に愧ずる有るなり（今己嬰俗網、故有愧虬鴻也）」とあり、李善は、詩の「愧」「怍」の主語を「己れ」、その客語を「虬」「鴻」と解す。「淵沈」「雲浮」は、「虬」「鴻」なのである。さらに李善は「淮南子」の「蛟竜は水に居り（蛟龍水居）」と「鳥は雲に飛ぶ（鳥飛於雲）」を引く。これによって、「水に居る」すなわち「淵沈」が、「蛟龍」すなわち「虬」であり、「雲に飛ぶ」すなわち「雲浮」が、「鳥」すなわち「鴻」であることを、重ねて示す。詩の「雲浮」「淵沈」は、一見主述文のようだが、そうではない。「雲に浮かぶ」モノ、「淵に沈む」モノの意である。それらが「愧」「怍」の客語になると読み取られている。

17「伊れ余 微尚を秉り」はどうか。「微尚」に李善は付注せず、典故を踏まえるとは考えられていないようだ。五臣は、張銑が「秉は持、微は小、浮は過なり。惟だ我れは此の小かに山水を尚ぶの節を持す（惟我持此小尚山水之節）」と記す。これに拠れば「尚」は「山水」を客語とする述語であり、「微」（小）はその連用修飾語である。一句

全体の述語である「秉」（持）の客語は「此小尚山水之節」なのであり、謝詩は「此」も「山水」も「節」も省き、「此～節」の七字を「微尚」に縮めた、と張銑は読み取っている。かくて、本来述語であった「微尚」が、「秉」の客語となる。「微尚」は「微かに尚ぶ」コトである。

右に挙げた2と16と17に再度着目したい。

2. 終然謝夭伐。

16. 薄霄愧雲浮、棲川作淵沈。

17. 伊余秉微尚、

先述したように2と16と17では、本来述語だった「伐」、「浮」、「沈」、「尚」が、それぞれ「謝」、「愧」、「作」、「秉」の客語に変えられていた。「夭伐」、「雲浮」、「淵沈」、「微尚」はそれぞれ「夭（わか）くして伐らるる」コト、「雲に浮かぶ」モノ、「淵に沈む」モノ、「微かに尚ぶ」コトと解された。「夭」、「雲」、「淵」、「微」は、「伐」、「浮」、「沈」、「尚」を修飾していた。そうとすればこの構造は、「江中の孤嶼に登る」詩の、李善注系『文選』に見える五句目に似ていないか。

亂流趨正絶、

李善が「正絶」の典故として引いた「爾雅」には、「水の正に流れを絶るは乱と曰う（水正絶流曰亂）」とあった。「爾雅」の「水正絶流」において、「絶」は述語であり、「正」は「絶」を修飾している。謝詩は、「絶」の客語である「流」を省き、「正絶」を「趨」の客語とする。かくて「正絶」は、前掲の「微尚」すなわち「微かに尚ぶ」コト等と同様に、「正に絶ちきる」トコロとなる。

李善注系『文選』の「亂流趨正絶」を受けいれた読み手たちは、その意識の底に、前掲の1から17までのような詩句を、沈殿させていたのではないか。吳・陳両氏のいわゆる「新穎用法」をしばしば織り込む謝詩であれば、「趨正絶」すなわち正に絶ちきるトコロに趨くという、破格で難解な語構成もありうると、彼らは感じていたかもしれない。

「亂流趨正絶」の破格と難解に比べ、下句「孤嶼媚中川」と次聯「雲日相輝映、空水共澄鮮」は、平明で「すなお」である。「正絶に趨く」語り手から、「孤嶼」に焦点が移った瞬間に、平明で優美な句が現れる。「亂流趨正絶」の破格な難解が、続く三句の優美な澄明を、一層際だたせひきたてている効果を、無視することはできないだろう。

七　「截流而度」と「趨正絶」

正絶派が「趨正絶」を推すゆえんが、もう一つ考えられる。

前掲した沈徳潜が「截流而渡」と引用していたように、「絶」字と「截」字の意味と音の共通性が、「截流而度」を

連想させやすいことである。先述のように「截流而度」は、謝霊運が南本涅槃経の改訳に用いたとされる。現行の南本涅槃経では、その巻二十一「光明遍照高貴徳王菩薩品之三」にある次の物語に、「截流而去」という形で登場する。[30]

数多の危難に襲われた男が、そこから逃げだそうとして、急流に阻まれる。船はなく、種々の草木を集めてイカダを作り、それに身をゆだねて手足を動かし、やっとのことで向こう岸に到達する。

即推草栰、置之水中、身倚其上。運手動足、截流而去。既達彼岸、安隱無患、心意泰然、恐怖消除。（すぐに草のイカダを推し、水に浮かべて、身をその上にゆだねた。手足を動かし、流れを截っていった。向こう岸に着くと、ほっとして、心が落ちつき、恐れが消えた）

右のくだりの後文に拠れば、急流は「煩悩」、イカダは「戒・定・慧・解脱・解脱知見・六波羅蜜・三十七品」を修めること、向こう岸は「常樂涅槃」であるという。[31]

「江中の孤嶼に登る」詩の読み手が、「截」に通じる「絶」を介して、涅槃経のこの物語を想起するならば、当然該詩に重ね合わせよう。詩の前半に綴られる空間の踏破と時間の蕩尽は、語り手が救いを求める必死の動きであり、ふいに目に入る「孤嶼」は「常樂涅槃」にほかならない。そうした読みに魅力を感じる読み手が、「正絶」に作るテキストを閑却することは、難しかったであろう。

八　むすびに代えて——古典文学の読み

小稿は、『文選』所収謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の三聯目上句における異文「亂流趨正絶」と「亂流趨孤嶼」について考察した。ただし、異文のどちらが謝詩の原文に近いかという観点からではない。唐代の写本の頃すでに両様あったとすれば、どちらが原文に近いかという判定は不可能である。そうではなく、どちらであればいかなる差異が生じ、いかなる効果がもたらされ、詩全体がいかに読み解かれるか、に焦点を当てた（以上、小稿第一章）。「亂流趨孤嶼」であれば、下句が「孤嶼媚中川」であるから、この聯は、『詩経』以来の「下句に上字を重ね」る、いわゆる頂真格の技法を用いていることになる。「下句に上字を重ね」ると、両句間の緊密化・連続化が強まる。それゆえこの技法は、異聯間では多用されるが、すでにまとまりをなす同聯内で用いる例は、少ない。初聯ではない途中の聯で同じ二字を重ねる例は、現存詩では、謝詩までの間に三篇ほどしか見当たらない。それらはいずれも長篇か中篇で、二字を重ねる聯とそれ以後の聯との間に、場面転換が起きている（第二章）。

「江中の孤嶼に登る」は全七聯で、謝詩の中でも短篇に属す。そしてくだんの第三聯「亂流趨孤嶼（正絶）、孤嶼媚中川」以外の六聯が、すべて対偶をなす。「孤嶼」であれ「正絶」であれ、全七聯で「亂流」聯のみが非対の聯なのである（第三章）。また、非対の第三聯の上句は、これに先だつ第一・第二聯とともに、叙述の焦点が語り手にある。これに反し、第三聯下句「孤嶼　中川に媚（うるわ）し」以降は、焦点が「孤嶼」に切りかわる。その切りかわりが、聯と聯との間ではなく、第三聯のただ中でおこっている（第四章）。それを、清代の何焯は「妙は上句の一頓に在り」と評した。何焯や沈徳潜は、第三聯上句を「亂流趨正絶」で読んでいる。下句にはじめて現れる「孤嶼」の意外性を、何焯らは「忽」という語で表現している（第五章）。

しかし、何焯らのように読むと、「趨正絶」が読みにくい。斯波六郎氏は「趨正絶」で一旦は読みながらも、「趨孤嶼」のほうが「すなおである」と付言する。鄧騫氏は「趨孤嶼」のほうが「文從字順」とする。だが、謝詩は「すなお」な詩だったか。謝詩には、李善所引の典故では述語である語が、詩では他の述語の客語に変えられている例が、七例見いだされる。ほかにも、述語として機能することの多い語が、客語化している例が十例はある。「正絶」も、典故の『爾雅』では述語だが、謝詩では「趨」の客語である。そもそも謝詩にはごつごつと、破格で晦渋な句が多く、決して「文從字順」ではない。ところが該詩の第三聯下句「孤嶼媚中川」以降は、平明で「すなお」な語が連ねられる。謝詩のもう一つの特徴である、透きとおった澄明さがあらわれる。第三聯上句の破格な晦渋が、下句以降の澄明を際だたせている（第六章）。加えて「趨正絶」は、「絶」字と「截」字の音義の類似から、沈徳潜が示唆するように、謝霊運が改訳した南本涅槃経の一節を想起させる。危機にある男が、「煩悩」の急流を、「戒・定・慧」等の修行のイカダで、「常楽涅槃」の向こう岸に渡る物語である。「亂流趨正絶」の読み手たちは、おそらく沈徳潜のように、この詩に涅槃経の一節を重ねていたと推量される。そうした豊かな読みを開く「趨正絶」を、読み手の多くが手放しがたかったことは想像に難くない（第七章）。

古典中国のテキストは、あれかこれかの二者択一で決せられるものばかりでは、おそらくない。とりわけ文学が、読み手の参入を須ってはじめて成りたつものであるならば、多くの人々が読んできた異文を切りすてずに、それらがどのように読まれてきたかという検討も必要であると考える。御批正をお願いするばかりである。

注

（1）足利学校蔵明州刊本（人民文学出版社影印　二〇〇八）、『奎章閣所藏六臣注本文選』（다운샘影印　一九九六再版　一九八三初版）に拠る。尤袤本李善注『文選』（石門図書有限公司影印　一九七六）には「唐李崇賢上文選注表」の末尾に「顯慶三年九月日上表」とある。謝霊運詩については、上記二本のほか、黄節『謝康樂詩注』（人民文学出版社　一九五八）、顧紹柏『謝霊運集校注』（中州古籍出版社　一九八七）等を参照した。なお李善注系本では、該詩三句目の「新」字を「雜」に作るが、形の類似による訛字と見る先行研究群に従う。

（2）前注所掲の足利学校蔵明州刊本と『奎章閣所藏六臣注本文選』、および『景印宋本五臣集注文選』（宋紹興辛巳建陽陳八郎崇化書房刊本影印本。國立中央圖書館　一九八一）に拠る。

（3）『藝文類聚』は影宋刊本（中華書局影印　一九五九）に拠る。ほか『尚書』『詩経』『爾雅』等の十三経は、四部叢刊本と『重栞宋本十三経注疏　附校勘記』（藝文印書館　一九七六第六版）に拠り、『玉臺新詠』は呉兆宜注・程琰刪補・穆克宏点校『玉台新詠箋注』中華書局　一九八五）に拠りつつ明小宛堂覆宋本『玉臺新詠』影印版（人民文学出版社　二〇一〇）を参照し、『古詩紀』は興膳宏他編『嘉靖本古詩紀』（汲古書院影印　二〇〇五）に拠り、その他は注記のない限り、四部叢刊本に拠る。

（4）王溥『唐會要』（上海古籍出版社標点本　一九九一）。巻三十六に「武德七年九月十七日、給事中歐陽詢奉勅撰藝文類聚成、上之」（七五九頁）。

（5）清光緒八年（一八八二）刻本の影印本に拠る。『文選』研究文献輯刊』（国家図書館出版社　二〇一三）所収。袁行雲「梁章詎著述多非自撰」（『文史』第十九輯　中華書局　一九八三）は、実際の編纂者は梁章詎の幕僚であろうと論じている。

（6）五臣の劉良注には「正絶流曰亂」とのみあり、出典名の『爾雅』を記さない。

（7）清光緒間（一八七五～一九〇八）貴池劉氏聚學軒叢書六十種本の影印本に拠る。前掲『《文選》研究文献輯刊』所収。

（8）拙稿「『詩経』から謝霊運詩までの頂真格の修辞――押韻句を跨ぐもの」（『東北大學中國語學文學論集』第一九号　二〇一四）、「同韻の二聯間における頂真格の修辞――『詩経』から謝霊運詩まで」（『集刊東洋學』第一一四号　二〇一五）、「「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」の修辞の系譜――同聯内における頂真格」（『六朝學術學会報』第十七集　二〇一六）。以下、順に第一稿、第二稿、第三稿と称す。

（9）以上については、注8所掲第一稿を参照。

（10）以上については、注8所掲第二稿を参照。

（11）以上については、注8所掲第三稿を参照。

（12）『文選』所収の謝霊運詩は三十九篇あり、なかで最も短い詩篇が「鄰里相送至方山」（巻二十）と「登江中孤嶼」の各七聯である。三十九篇の平均は十聯弱で、最長が「還舊園作見顔范二中書」（巻二十五）の二十一聯。『文選』所

収詩は、他の類書等の所収詩より省略の可能性が少ないと考えられるので、考察対象とした。

(13) 「助字」については、小川環樹『唐詩概説』(岩波書店　一九五八)一二二頁の定義に従う。

(14) 「〝乱流趁正絶，孤屿媚中川〟，纵横交错的水流突然在前方阻断，一座未名的孤屿千娇万媚地出現在大江之中。」(余冠英主編『中国古代山水诗鉴賞辞典』一九頁。江苏古籍出版社　一九八九。当該部分は沈玉成氏担当)、「在急乱的江流中，小岛孤屿显得那样的谐美。」(张秉戌主编『山水诗歌鉴賞辞典』四一頁。中国旅游出版社　一九八九。当該部分は林冠夫氏担当)、「乱流：激流。…激流冲荡悬崖绝壁处，江中孤屿妩媚现眼前。」(阴法魯审定『昭明文选译注』第四冊六八六頁。吉林文史出版社　一九九二)、「那紛亂水流的趨向，是正在横斷江水，這孤獨矗立的江中山嶼，更增江水中流的美好。」(王令樾『文選詩部探析』三四三頁。國立編譯館　一九九六)、「〝亂流趨正絶〟句寫一股溪水好像有意要衝到河中把正流決斷。」(王小婷『清代《文選》學研究』七二頁。上海古籍出版社　二〇一四)等。

(15) 孫炎曰、逆渡者、逆流也。順渡者、順流也。

(16) 目加田誠『定本詩経訳注(上)』(龍溪書舎　一九八三)二五六～二五七頁。美しい訳文で何の異論もないので、そのまま引用する。

(17) 西傾、山名。桓水、自西傾山南行。因桓水是來、浮于潛。漢上曰沔、越沔、而北入渭、浮東渡河。

(18) 『吉川幸次郎全集』第八巻四一〇～四一一頁。筑摩書房一九七〇。

(19) 目加田誠『定本詩経訳注(下)』(龍溪書舎　一九八三)六七頁。

(20) 該詩末二聯の「想像」「緬邈」「信」の主体は、再び「亂流」句までと同様語り手で、詩の前半に呼応する。しかしそれは「孤嶼」句と直後の二聯に深く浸潤された語り手であり、前半の語り手とは質を異にする。

(21) 『義門讀書記』文選第二巻「詩」。乾隆三十四年(一七六九)長洲蔣氏刻本影印本に拠る。前掲『《文選》研究文献輯刊』所収。

(22) 「肇論疏」に「謝靈運文章秀發、超邁古今。如涅槃元來質樸、本言、手把腳蹈、得到彼岸。謝公改云、運手動足、截流而度。」(『大正新脩大藏經』第四十五冊一六二頁。以下大正蔵と略称)。謝霊運の改訳を含むとされる現行の慧厳等訳「大般涅槃経」巻二十一「光明遍照高貴德王菩薩品之三」には「截流而去」とある。大正蔵第十二冊七四三頁。

(23) 「肇論序」に「至如彌天大德・童壽桑門、竝創始命宗、圖辯格致、播揚宣述、所事玄虚、唯斯擬聖默之所祖。自降乎已還、歷代古今、凡著名僧傳、及傳所不載者、釋僧叡等三千餘僧、清信檀越謝靈運等八百許人。至能辯正方言、節文階級、善覈名教、精搜義理、揖此群賢語之所統、有美若人、超語兼默。標本則句句深達佛心、明末則言言備通衆教。諒是大乘懿典、方等博書」(大正蔵第四十五冊一五〇頁)。

(24) 許慎『説文解字』(二世紀半ば)巻十二下に「截、斷也。从戈雀聲」、巻十三上に「絶、斷絲也」、劉熙『釋名』(三

世紀初）「釋言語」第十二に「絶、截也、如割截也」。「截」は「截」の異体字で、『玉篇』（六世紀半ば）を重修した『大廣益會玉篇』（十一世紀初）戈部第二百六十二に「截、在節切。齊也、治也、斷也。亦作截」（『宋本玉篇』中国書店影印　一九八二）。『廣韻』（十一世紀初）では「截」が入声屑韻第十六、「絶」が入声薛韻第十七に属すが、屑薛両韻は晋宋当時同韻で韻母を同じくしていたことが、于安瀾著・暴拯群校改『漢魏六朝韻譜』（河南人民出版社　一九八九）三一二～三一六頁、周祖謨『魏晉南北朝韻部之演變』（東大図書股份有限公司　一九九六）七頁および六一七～六二一頁から分かる。声母も近い。「截」は、上掲したように『大廣益會玉篇』に「在節切」、「絶」は同糸部第四百二十五に「才悦切」、および『原本玉篇殘巻』（中華書局影印　一九八五）に「似悦反」とあり、「在」「才」「似」は歯茎音。

(25)　前掲『義門讀書記』文選第二巻「詩」。沈德潛『古詩源』巻一〇（中華書局標点本　一九六三）二三七頁。現代では『汉魏南北朝诗选注』（北京出版社　一九八一）三三〇頁に「这二句是说船正迅速地从江中横渡，突然发现优美动人的孤屿山在江流中间挡住了去路」（邓魁英氏担当）。

(26)　斯波六郎・花房英樹訳『文選』（筑摩書房　一九六三）二八四頁。

(27)　吴冠文・陈文彬『庙堂与山林之间：谢灵运的心路历程与诗歌创作』（复旦大学出版社　二〇一三）一五五～一六二頁。

(28)　高木正一「六朝における律詩の形成」（『六朝唐詩論考』所収　創文社　一九九九。初出は『日本中國學會報』第四集、一九五二）八～十五頁。

(29)　「睽」は、『文選』の音注に「苦圭」とあり、苦圭の切。「攜」は、『説文解字』巻十二上手部に「戸圭の切」、『大廣益會玉篇』手部六十六にも「戸圭の切」。「睽攜」は畳韻である。「悽」は『説文解字』巻十下心部に「七稽の切」。「戚」は『説文解字』巻十二下戈部に「倉歴の切」、「倉」は同巻五下倉部に「七岡の切」。「悽戚」は双声である。『大廣益會玉篇』でも、「悽」は心部八十七に「七奚の切」、「戚」は戈部二百六十五に「千的の切」、「千」は十部五百七に「且田の切」、「且」は且部二百四十九に「七也子余の二切」。

(30)　大正蔵第十二冊七四二～七四五頁を参照。

(31)　大正蔵第十二冊七四五頁に「路値一河者、即是煩惱。…至煩惱河、修戒定慧解脱解脱知見六波羅蜜三十七品、以為船栰。依乗此栰、渡煩惱河、到於彼岸、常樂涅槃」。句読点は引用者。

＊本研究は科学研究費補助金 15K02430 による研究成果の一部である。